

The Fulbrighter
in
Chubu

NO. 13

March 2003

CHUBU Garioa / Fulbright Alumni Association

巻頭言

G・F 中部同窓会 20周年を迎えて

千田 純一

ガリオア・フルブライト中部同窓会の設立総会が愛知会館で開かれたのが1982年5月のことでしたから、早いもので今年で20周年を迎えたこととなります。設立総会に至るまでの経過については、設立に向けて尽力され、G/F 中部同窓会の初代会長を務められた高仲 顕氏の特別寄稿(本会報掲載)をお読みいただきたいと思いますが、筆者自身は、当時始まった奨学資金募集運動に対してたまたま早い段階で募金したことが機縁となって設立発起人会に出席するよう要請され、それ以後役員として中部同窓会の運営に関係することとなり、今日に至っております。

発起人会や設立総会の段階では、「なぜ自分が・・・」という戸惑いを持ちつつ参加していましたが、そのうち徐々に、この会はいろいろな意味で筆者個人にとっても得がたい経験をさせてくれる有難い会であると思うようになりました。

とくに、役員会や総会において、種々の分野で活躍中の第一級の会員やゲストの方々と出会い、議論し、雑談し、また講演を拝聴したことは、まことに貴重な体験でありました。あの方もフルブライターなのかと、フルブライト計画の奥深さに驚かされ、その意義の大きさに感銘を受けたことが幾度もありました。これほど広範囲な分野の人々と親しく交流できるのは、この会ならではのことであった次第です。

また、フルブライト同窓会全国大会(40周年記念事業、92年9月、横浜)への参加、東京での日米教育交流振興財団理事会およびそれと同時に開催の東京同窓会などへの出席、米国教師訪日団の東海地方訪問の接待なども筆者にとって記憶に残る体験です。人的交流を通じて相互理解を促進するというフルブライト・スピリットに多少なりとも貢献できたとすれば、

うれしいことです。

以上、G/F 中部同窓会に関わる筆者のささやかな体験を述べさせていただきましたが、多くの会員の努力でここまで来た本同窓会が20周年を超えてさらに発展していくことが望まれます。本会報に掲載されている20周年記念トーク、および木下宗七会長が準備された「同窓会報総目次」等の資料に目を通していただきたいと思います。とくに若い世代の会員がより積極的に参加され、今後の運営を引き継いで下さることを期待いたします。

「駅伝競走」という日本人が発案した競技がありますが、本同窓会のような活動は駅伝に似ていると思います。存在価値がある限り、次々とバトンタッチしながら、起伏を乗り越えて継続していくことが求められているのではないのでしょうか。(ガリオア・フルブライト中部同窓会副会長)

Fulbrighter in Chubu No.13

目 次

巻頭言

G・F 中部同窓会 20 周年を迎えて・・・千田純一・・・i

Guest Speech

「トヨタの経営グローバル化とアメリカ進出」

・・・畑 隆司・・・1

中部同窓会 20 周年記念トーク

はじめに・・・藤本 博・・・13

アメリカとの出会いと看護教育創造の 40 年

・・・馬場昌子・・・13

留学生生活を通して見たアメリカ・・・和邇赳城・・・15

留学を通して見たアメリカ・・・山本恵理子・・・16

特別寄稿

中部同窓会創立 20 周年に思う・・・高仲 顕・・・18

随想

カルチャー・ショック・・・今光廣一・・・24

フルブライト留学生と私のルネッサンス・・・藤本文弘・・・26

思い出すままに・・・吉原道子・・・31

フルブライトプログラムでの留学の前後 10 数年

・・・熊野善介・・・33

チャイナ・タウンの光と影・・・平岩恵里子・・・36

会員便り・・・39

会員移動・・・45

会議記録	46
役員会（第一回、第二回、第三回）	
2002 年度総会 2002 年度例会	
平成 13 年度会計報告	50
同窓会資料	
歴代役員名簿	51
同窓会員の滞在地域分布	53
同窓会員の渡米年度分布	55
会報総目次（1984—2002）	56
事務局より	59

Guest Speech (June 14, 2002)

トヨタの経営グローバル化とアメリカ進出

畑 隆司

1 時間ということで、詳しいことは申し上げられませんが、簡単に私どもの会社の概要をご紹介申し上げ、それからどのような形でトヨタがグローバル化に向けて事業を展開しているかということ、それから特に、ご紹介いただきました通り、私は企業の中で人事関係の仕事を長くやっておりますので、その観点からみたトヨタの特徴でございます人を育てる文化、こういうことを起点にして、アメリカで会社を作り、あるいはグローバル化を進めてきたという思いもございますので、この辺を若干触れて、それから米国での話を、それから、それをベースにした会社全体のグローバル化のお話、それから私どものある意味での社会にとってよき企業市民に、というところについてご紹介申し上げたいという風に思います。

実はこの話をしたいというご依頼を受けました後、アメリカ時代のケンタッキーの友人から e メールがきまして、ちょっと思うところがあったもので、紹介申し上げたいと思います。

私はアメリカで 84~89 年まで足掛け 6 年生活しておりました。最初 2 年間はワシントン DC で少し勉強しまして、その後、トヨタがケンタッキーに車両工場を設立するときに、第一期出向者として参画いたしました。このなかにひょっとして私よりもケンタッキーに詳しい方がいらっしゃるかもしれませんが、当時私が参りましたときには、日本国籍を持ってケンタッキー州に住んでいる人間はほんの数人しかおりませんでした。今は、私どもが工場を持ちましたレキシントン郊外だけで多分数千人位の日本人が住んでいると思います。多分、日本からの投資も、カリフォルニア、ニューヨーク、ニュージャージーという沿岸部を除きまして、もっとも大き

い州の1つとなっているのではないかと思います。そのときは、私はトヨタの第一期出向者として参ったものですから、日本人を見るのも初めてという方がほとんどで、その意味で受け入れ側のケンタッキー州の方々も、日本人に対する戸惑いがありましたし、私どもの方にも勿論戸惑いがありました。

たまたま私たちが住んだ家の隣に、アメリカ人でトムとスーザンという私よりも10年くらい年配のカップルがいて、この方たちに本当によくしていただきました。クリスマス・パーティとか何だとか、娘を連れて行ってくれたものです。私は仕事が忙しいし、家内も満足に英語が話せない状態で、ほとんど親代わりをしていただきまして、学校のPTAに行ってもらったりもしました。アメリカの異文化を受け入れる器の大ききみたいなものにもものすごく感激をしました。

そのほかにも、娘が通っていた小学校の20くらいのクラスもどんどん日本人が増えていきました。校内に25~26人の英語が理解できないような日本人の子供がいる。そうするとそこに仕事をもたれていない生徒のお母さんがクラスマザーとして、無償で一日中つきっきりで英語のできない子供をサポートしてくれる。本当にアメリカは懐が深いなと感じました。その世話になったトムからeメールで、ガンの診断を受けてあと数ヶ月しか命がない、ぜひもう一度私ども家族に会いたいというメールが10日ほど前にありまして、お正月休みに家内と娘を連れてもう一回トムとスーザンのお宅にお邪魔しようかなというようなことを思っておるのですが、本当に私の20代から30代の中頃まで過ごしましたアメリカというのは、ある意味ですばらしい所だなと思いました。ちょっと本題から離れましたが、そんな思いを含めながら今日はお話を申し上げたいとこんな風に思います。

会社の概況は、ご存知の通り主に自動車を作って商売をしております。1937年に創立しましたので、65年程経った会社でございます。最近ではトヨタ自動車という単独企業よりも、資本関係があるグループ全体を含めて規模だとか、事業活動を説明することが多いのですが、トヨタグループ全体としますと、約22~23万人の従業員がおりまして、売上が15兆円、生産台数及び販売台数は510~520万台、というような規模になっておりま

す。このような概況ではございますが、今日は先ず今までトヨタはどんな格好でグローバル化を進めてきたかということをお報告申し上げたいと思います。

非常に粗っぽくではございますが、私どもトヨタ自動車のグローバル化は、3つのステージに分けることが出来るのではないかと考えております。創業時から1970年代終わりまでをある意味では第1ステージと位置付けることができると考えています。この頃は主に日本の国内でクルマを作りまして日本の国内のお客様を中心に愛顧いただいていたわけですが、海外展開という意味では、その一部を海外に輸出をしていた、あるいはその割合が若干増えてきて、海外で使っていただくお客様の数が増えてきたという時代でした。一言で言うと完成車輸出の時代です。この時代は、ごく一部の英語に堪能な社員のみが、それこそアンカレッジ経由でアメリカに渡ったりした時代でございます。ごくわずかな日本人、語学のできる日本人が、日本企業にとっては未知の市場に出て車を売っているという時代であります。したがって私ども人事の仕事としては、そういう世の中に非常に少ない英語が出来る人材を如何にして採用するか、また、採用した人にアメリカなりアジアなりヨーロッパなりに行ってもらって、外貨持ち出しが非常に厳しく制限されているなかで、無事に生活して車を売ってもらうようケアする、というのが主な内容でございました。私どもとしては「海外人事課」という組織で、そういった仕事を担当しておりましたが、こんな時代が第1ステージとして捉えられます。

1970年代の初めに、皆様ご記憶だとは存じますが、オイルショックがございました。オイルショックは自動車業界にとって大きなダメージを与えたわけですが、コンパクトカーを作っていた日本の自動車会社にとっては追い風になりました。コンパクトカーというのは小さなクルマのことですが、極めて燃費効率がよく、アメリカ車のようにガソリンを撒き散らすことがない。石油ショック時代にそれが幸いしました。アメリカでもオイルショックの後、トヨタ車や他の日本製の自動車が市場で広く受け入れられました。その結果何が起こったかというと、日本車の売上が伸びたものから、結果的にはアメリカのビッグ3、GM、フォード、クライスラーの

売上が落ちたわけですが、そしてそれらの会社の工場が、場合によっては工場閉鎖に追い込まれ、失業が増える。ご存知の通りアメリカの自動車産業はUAWというかなり力のある労働組合が従業員を代表してしまっていて、そういうところの声もあって、自動車における日米貿易摩擦みたいなことが起こりました。

それを解決する手段として、日本のメーカーもアメリカで車売るのであれば、アメリカに工場を作るべきだという議論が沸いてきました。トヨタは自動車づくりにおいてヨーロッパに遅れること1世紀、アメリカでGM、フォードという大量生産の仕組みが出来た時代から遅れること50年で自動車業界に参入したのですが、とてもじゃないけれどアメリカの深部に入ってそこで生産拠点を作り、そして事業をすることにものすごく恐怖感があった。自信がなかった。しかし、今申し上げたような社会的背景の中で1980年代に初めてアメリカに工場を持ちました。

最初は単独ではノウハウも何もないものですから、ゼネラルモーターズとのジョイントベンチャーでサンフランシスコ郊外のフリモントにNUMMIという会社を作りました。先に申し上げましたように、第1ステージではごく限られた英語の出来る人を海外に送り出して、その人たちが海外で車売りのサポートを日本側からしていました。しかし、この第2ステージになると、事務も経理も工場働いているワーカーも、全てのノウハウをアメリカ人に向けて展開する必要がある。要するに、われわれが日本でやっていたことが実は日本という特殊な風土の中でしかできないことなのか、あるいは、国境だとか言語・文化の壁を超えて説明できるものであるのかというような、自分達がやっていることを振り返るような作業、それを英語にする作業、そしてそれを展開する為に大量の従業員をアメリカに派遣するという仕事ができたわけです。私ども人事の仕事も極めて大きな変質をしたというのが1980年代です。ちなみにこの頃、海外関係の人事の仕事は「国際人事室」という組織でやっておりました。

第3ステージですが、1990年代になりますと、海外の生産が成功し台数がどんどん増えてきます。アメリカでも、ヨーロッパでも増えてきます。アジアでも増え、その他世界各地で増えてきたというようなことがござい

ます。

これは、私どもの生産台数をあらわしたグラフでございますが、緑の部分が日本国内の生産台数で、赤の部分が海外での生産台数です。ごらんいただく通り、赤い部分が著しく伸びて緑の部分が減っております。これは販売台数ですが、販売においても同様に赤い部分が増えており、現在では約2/3が海外で販売されている、さきほどのグラフは生産でありますけど、生産で申し上げますと1/3くらいが海外で生産している。したがって、大まかに言うとトヨタのビジネスの半分以上は海外でしているということになります。

そのような状況ですので、先ほど私どもの連結全体の従業員22万人と申し上げましたが、トヨタ自動車単体では7万ですので、15万人はトヨタ自動車以外の社員、そのうち海外では4~5万人の従業員がいることになります。

これが世界に私どもが持っている拠点の俯瞰図です。販売拠点数では、ヨーロッパで26社、アフリカで49、中近東で17社、オセアニア17社、アジア12社、北米4社、南米42社になります。その他に、ご覧のような生産拠点及び開発拠点がございまして。このような内容や規模で企業活動をしているものですから、当然、私どもが対象とする人材、人事の仕事の対象者は、先にお話しいたしました第1ステージや第2ステージとは違ってまいります。世界各地で採用されたその国その国の人たちが全てトヨタのメンバーであり、その人たちの人事管理をどうするかというのが、第三のステージでございます。

それに従って、私どもは海外人事課から国際人事室となっていた組織を、グローバル人事部へと拡充いたしました。グローバル人事と国際人事では、グローバル化と国際化がほとんど同じような意味で使われることが多いのですが、私どもは異なるフェーズのものだと考えております。海外人事や国際人事は、日本と日本以外の国との違いをきわめて意識した名称であります。グローバル人事では日本と海外ではなく、日本を含めた世界全体を一貫して視野に置いた人事を考えております。

そういったグローバル化の中で私どもが何をやっていくかということ

ですが、大きくは2つではないかと思えます。1つは、私どもトヨタの本質であります人を育てる企業文化あるいは人間性尊重の企業文化を、世界中のトヨタで実現するという事と、2つめはトヨタがオペレーションを行うそれぞれの地域社会に貢献するという事。

まず、人を育てる文化であります。先ほど申しましたように65年くらい前、欧米に半世紀以上遅れて自動車業界に入りまして、その頃にはわれわれ何のノウハウ、知恵もないものですから、結局ノウハウをつくらうと思うと人をつくるしかない。私どもは企業のコア、要の信念として、とにかく人をつくらう、人をつくれればモノは自然に出てくるというような考え方を持っております。いろいろなところで歴代のトップがそんなことを言っていて、人材こそ経営の要だというように唱えています。そのような考えの元に日本国内で仕事をしてきましたが、同じ理念を世界中で展開していきたいと思っています。

トヨタの人材育成の特徴でありますけど、まず、一番大きな特徴は仕事をしながら人を育てるということです。つまりOJTがトヨタの人材育成の大きな柱になっています。先ほど申し上げたように、私ども何のノウハウもないところで自動車のビジネスに入ったものですから、とにかくビジネスを回さなければならない。ビジネスをしながら人を育てていくということが必要だった。従って、後輩とか部下を育てること自体が大切な仕事の1つだということです。そして、その文化をアメリカに入ったときにも伝えようといいました。先に入って仕事を覚えた人はニューカマーに仕事を教えなさい、管理監督者になった人間は自分の仕事と同様に、あるいはそれ以上に部下を育成することがものすごく大切だということを相当強調しました。

なぜ人材育成重視、あるいは人間性尊重なのかといえますと、私どもは当然企業ですから利益をあげていくということが当然必要なわけですけど、人が企業で働くということの目的の中で、当然生活のベースである給料を得るという事も大事ですが、より根源的には社会における自分の存在場所を確認することが非常に重要なのではないかとこのように考えるからでございます。社会における自分の存在場所を確認するという事は、ある意

味では、昨日の自分より今日の自分の方が成長しており、そのような成長の中で自分の勝ち取った経験や能力が社会で必ず生かされる、社会のために貢献が出来るということ、それぞれの構成員、従業員が感じるということだと考えます。そうすることによって人が成長するし、結果的にはそれが経営のパワーになっていくのではないかとそんな感じがします。

トヨタの言う人材育成と人間性尊重とは今申し上げたように、人を人として扱って、人を育てるということを主眼に置いているということですが、それをアメリカで、私の参りましたケンタッキーの工場で開催した話をいたします。先ほど申しましたゼネラルモーターズとのジョイントベンチャーのNUMMIという会社に続いて、今度は単独で100%トヨタの資本で初めてアメリカに工場を持ったのは、このトヨタモーターケンタッキーという会社でした。今は下請けを入れまして従業員8千人、年間の生産力は50万台くらいです。単独の工場としては世界中のトヨタの工場の中で最も大きい規模ではないかと思えます。

ここでさきほど申し上げた人間性尊重の文化、人を育てる文化をしたいということで、いろいろな取り組みをやってきました。教育機会の提供ということで、これはお話し申し上げると信じられないといわれますけど、この会社を作ってアメリカで採用した現場のチームメンバーの中に、チームリーダーという役職があります、これは5人に1人くらいのリーダーですけど、その上に20人に1人くらいグループリーダー、組長という人ですが、がいます。このチームリーダーとグループリーダーを全部日本に呼んで数ヶ月間の研修を行いました。延べ4千人以上の人が日本にきて研修を受けたのです。それ以外にも、社員教育のプログラムも充実しており、大学に戻りたい人は授業料の補助をしたりもしました。最近ではアメリカの企業も社員教育を充実する方向に向いておりますけど、1980年代くらいでは企業内で教育をするということは極めて珍しく、色々な先生方とか企業の見学者がございました。

それからもう1つは、経営活動への参画ということです。我々は、従業員あるいは組織の構成員は、自然発生的に組織をよくしようというアイデアが湧いてくるのだと、そのアイデアを組織に取り入れてほしい、あるい

は聞いてほしいというような要求があると考えておりますで、そのようなアイデアをきちんと制度として採用するような仕組みを持ちたいと思っております。ここでは創意・工夫提案制度というようなことがありますけど、要するに、提案を構築させるということがあります。あるいは小集団活動、QCサークル活動というようなものを取り入れたりもしました。自動車製造工程というのはベルトコンベアで流れておりまして、最初鉄板からずつとコンベアを流れて、最後の工程になると、完成した自動車が出来てくる。そこに少しずつの作業工程を受け持ちながら仕事するということでありまして、そのコンベアのスピードをどう設定するかによって生産量が決まってくる。したがって、そのコンベアが動かないというのが一番困るわけでごさいますで、伝統的に欧米の自動車メーカーでは、コンベアを止めてしまうということは、ほぼ無条件で解雇要件を構成する。コンベアをとめるようなことはやってはならない、というような環境があるわけです。

それに対して、トヨタの場合は、作業者の一人一人上に紐がありまして、自分が作業できない、あるいは問題が生じたときには、とにかくその紐を引っ張ってラインを止めてくださいという仕組みを持っています。この説明をしたときに、そんな権利を作業者に与えていいのかという話があったのですが、我々はむしろ、それは作業者の義務だと説明しました。要するに、ラインを止めるということは、そこに何か問題があるので、その問題を皆で解決するということなのだ。一人一人の作業者はトヨタの一員として会社を、あるいは製品を良くしようとする責任を負っているわけで、問題があるときにはごまかさないうでラインを止めてしまうことが大切なのだという意味合いで説明いたしました。

ここまで仕事の中での人間性尊重という話をしてまいりましたが、コミュニケーションということでも人間性尊重を重視しております。私がケンタッキーにいたときの社長が今トヨタの社長をやっております張というのですが、彼は個室に入らずにいつも大勢の皆のいるところに席を持っていて、いつでも現場の人もオフィスの人も誰でも社長と話が出来ることがありました。あるいは家族も含めて、会社の人ということで社内報を自宅に送ったり、会社の催しに家族にも入ってもらうとかもや

りました。社内託児所をつくり、お子さんを持つ女性の方のために会社でお子さんの面倒をみるということもして、従業員を大切に人間性を尊重していこうと努力しました。そのことが結果的には企業の活力なりエネルギーになって、企業の収益にも貢献しているのではないかと我々自身は思っています、こういうことをここ20年かけてやってまいりました。

この時点で評価するのは、まだ時期尚早かもしれませんが、おかげさまで80年代前半にスタートしたアメリカでの自動車製造も先ほど申し上げましたように、全部で100万台くらいになりました。これをベースにしてヨーロッパでも、アジアでも、オセアニア、アフリカでも車が、トヨタのやり方が言葉だとか、宗教だとか民族を超えて受け入れていただけるのは、我々にしてはきわめてありがたいことだと思っています。

これがトヨタのグローバル化の状況でありますけど、あとちょっと、10分くらいかけまして、現在のグローバル化についての取り組みをお話申し上げたいと思います。先ほど申し上げましたように、海外で、ほぼ日本のトヨタ自動車の従業員と同じくらいの従業員が働いています。伝統的に、日本の会社は海外に行くときには、日本人を海外の会社の経営者として派遣しております。アメリカの会社もアジアの会社も、日本企業を訪問しますと、社長は日本人の方がいらっしゃるというが多いです。トヨタ自動車もそういう形でやってきました。ところが、先ほど申し上げましたように、ケンタッキーでは8千人の従業員を、人間性を尊重しながら育成し、従業員が持っている不満なども聞きながらやろうと思うと、とても日本人だけではマネジメントできません。あるいは、8千人の会社というのはケンタッキー州では最大ではないかと思うのですが、そうすると地域社会のなかでの役割分担が出来てまいります。従って、どうしても日本人のマネジメントから現地人のマネジメントに交代して行く時期がございます。

ところが一方では、1937年に会社を作ったときからずっと、私どもには何とか自動車作りを通じて世界に貢献したい、あるいは自動車作りを通じてそこに働く人たちの人生を豊かにしたい、あるいはいい人材を育成したい、というような思いがございます。仮にトヨタがアメリカ人あるいはイギリス人に社長をやってもらうにしても、トヨタの持っている普遍的な

信念みたいなものをどうしても共有して欲しいという思いがございます。権限委譲をしながらどうしたらそのようなトヨタの企業理念を共有した人材を育成して、どういう風に管理していけるかということが、この時代では大きな課題になってまいりました。

私どもの人事に関する基本的な考え方といたしまして、3つのポイントがございます。1つが多様性です。トヨタではDiversity（多様性）という言葉が最近良く使われますけど、人材、文化、宗教すべての点において、私どもは実に多様なお客様に車を買ってもらっている。お客様が非常にバラエティに富んでいるので、供給する会社の側もDiversityを体現しないと、本当の意味でのメーカーとしての役割を果たしていけないのではないかと思います。2つ目が、人材育成と能力主義です。トヨタで仲間として一緒に働いている人たちをきちんと育成して、それぞれが持っているアビリティを上げていきたい。そして一人一人の能力向上や、頑張った成果に対して報いていきたいという思いがあります。それからもう1つが企業理念の共有です。先ほど申し上げました、われわれが自動車というビジネスをやる時のトヨタのフィロソフィをトヨタの仲間全員が共有して、きちんと尊重したいという、この3つのことを基盤としていろいろなグローバル人事の仕組みを考えているわけです。

具体的には、ここに書いてありますGLOBAL21プログラムを通して、トヨタウェイあるいはトヨタ意識の浸透や、トヨタウェイに基づく評価制度の運用を行っております。GLOBAL21プログラムというのは、トヨタ自動車の従業員だけを対象にした人事制度ではなく、世界のトヨタで働く人を広く対象とする人事制度ということで、地球規模で一貫性のある人事制度を作っています。トヨタ自動車の海外の会社に入った人も含めて管理をし、育成や配置を考えていくということですので、きちんとした組織で検討し決めてゆくために、トヨタの経営幹部によるグローバル・サクセッション・コミッティー、あるいはグローバル人材協議会という会議体を設け進めております。

それから、トヨタウェイということですが、これはトヨタには自動車作りを通して社会に貢献したいという、世界の人類の進歩に貢献したいとい

うような思いがあるわけですが、それを実現するためにトヨタの幹部はどのような行動や発想を求められるかということ、はっきり伝達するためのものです。私どもは30年位前にトヨタに入って、ずっと先輩の背中を見てやってきましたので、こういう風に行動したらトヨタ的だということは染み付いているわけですが、日本人以外の方が海外でトヨタの仲間に入りたいたいといった場合、そういう暗黙知ではやっていけないということで、これを明文化する作業をここ数年間やっております。

トヨタウェイの内容ですが、1つは、Respect for People、人間性尊重です。お客様も、株主も、従業員も、トヨタにかかわる全ての人にきちんと尊敬の念を持って接してゆきたということです。もう1つが、Continuous Improvement、知恵と改善です。トヨタは地に足をつけて企業を良くしていきたいというカルチャーがものすごく強いと思います。このカルチャーは世界の何処にいても失いたくないのです。バブルの時も土地で儲ける、株で儲けるといふより、1つ1円でできているビスを、明日は99銭で出来ないかというようなことでやってきました。トヨタウェイとは、こういったことを、トヨタの生産や販売に関わる幹部に、仕事を進める上での基本としてわかってもらおうということです。これは日本で出来たトヨタの考え方を世界中にばら撒いて押し付けようということではなく、むしろそれぞれの現場で考え方をはっきりさせて、これだけを最低限やってくれば、地域で独自に裁量権を持って、地域の特性等を入れながら、自由にやってくればよい。こういうことをすることによって、各地域の自由裁量権がふえる、そのための仕組みだと考えており、それは企業のグローバル化には必要なのだと思っています。

私どもは30年という長い時間の中で、先輩の姿を見て覚えるわけですが、かならずしもそういう余裕が許されないのであれば、きちんと理解できるように教えていこうというので、社内教育機関としてトヨタ・インスティテュートというのをこの1月に作って、私が事務長を兼任しています。トヨタ・インスティテュートではトヨタウェイを基本に、グローバル経営者を育成しようということ、それからもっと実務に近いところでミドルマネジメントを育成しようという2つの目標を持っています。

このようにトヨタウェイを策定し、それをベースに、人材育成やグローバル幹部の職能評価をやっていきます。職能評価ではトヨタウェイをどれだけ体現できるかということが評価の基準です。それから、業績評価として、期間毎に幹部に与えられた目標をどれだけ実現できるかを評価しております。

今は、TMS というアメリカの販売会社の COO や、私が最初に行ったケンタッキーの製造事業体の社長をアメリカ人がやっております。それからカナダの製造事業体でもカナダ人が社長をやっています。このように、ここで失敗するとトヨタ本体がおかしくなるというような、かなり重要な会社のトップが今すでに現地人になり、皆様にもトヨタもグローバル化が進んだなということがご理解いただけるのではないかと考えています。

私どもは車という耐久消費財を作っております。結局、その国や地域で生活している人たちが車を使えるような状態にならないと、自動車産業というのは成り立ちません。人件費が安いということでいろいろな企業が中国に出て行かれますが、私どもは、中国でもやはり車を買っていただける方が相当数にならないと中国で工場を作ることの意味がないと考えます。ケンタッキーのように私どもが会社を作ったときには、消費、所得も生活レベルも、50州のうちで45・46番に位置するという状況だったのですが、今ではケンタッキー州はアメリカの中でも豊かな州の1つになっています。そういう風に、地域にきちんと貢献する、税金も納める、そこで生活している人たちが働く場所を提供する、こんなことを考えてアメリカもヨーロッパもその他世界の各地にも工場作りをしていきたいなど、こんな思いでグローバル化を進めています。

どうもありがとうございました。

<ゲスト略歴>

- 1976年3月 大阪大学(経済学部) 卒業
- 1976年4月 トヨタ自動車販売株式会社 入社(1982年製販合併)
- 1997年1月 人材開発部(室長)
- 2000年1月 グローバル人事部(部長)

ガリオア・フルブライト中部同窓会

20周年記念トーク

昨年11月30日午後3時から名古屋大学大学院国際開発研究科棟8F会議室にて中部同窓会設立20周年を記念して「記念トーク」を開催しました。この記念トークでは「留学生活を通して見たアメリカ」と題して、馬場昌子氏(58GS)、和邇起城氏(1961GS)、木下徹氏(1989GS)、山本恵里子氏(1998RS)の四人の同窓生の方々からアメリカ留学経験とそこから得たことをお話しいただきました。四人のお話の後、二、三の参加者の方々からもご自身の留学体験をご紹介いただき、それぞれの参加者がフルブライト奨学金によるアメリカ留学を振り返る、中部同窓会20周年に相応しい有意義な会となりました。以下は、当日のお話の概要をまとめていただいたものです(木下徹氏につきましては、次回のニューズレターにて紹介させていただきます)。

[藤本 博(1977GS) 記]

アメリカとの出会いと看護教育創造の40年

馬場 昌子(1958GS、看護学)

現在、愛知医科大学看護学部教員の一人として若い学生とともに21世紀の看護について胸を熱くして学び合っております。ここまで来る中で私の人生に二つの転機がありました。

一つは、高校3年の時、占領軍総司令部の第二代目看護課長として日本の看護と看護教育の改革にあたっておられたミス・ヴァージニア・M・オルソンに出会ったことでした。当時、私は英語の勉強になればと彼女のバ

イブルクラスに通い出したのでした。昭和 25 年の高校卒業も迫ったある日、ミス・オルソンは「日本の少女に月々学費を援助したいと言っているアメリカの婦人たちがいるが、受けないか」と言われ、進学をあきらめていた私は感謝してお受けし、聖路加女子専門学校に進学しました。人格的魅力溢れるミス・オルソンのようなナースに私もなりたいと願ったからです。看護を学ぶ3年の間、仕送りは途切れることなく続きました。現代「あしながおじさん」物語そのものでした。

その後、恩師の招きで創設当初の東京大学医学部衛生看護学科（現健康科学・看護学科）に臨床看護系の助手として採用されました。当時、日本での看護系の大学はやっとできたばかりですから、創設後の数年間は看護学創造の生みの苦しみでした。（その頃の学生の多くの方々は今、全国各地で看護系大学の学部長、学長の重責を担っておられます。）

その中で私の人生に第二の転機がやってきました。ミス・オルソンの尽力でフルブライトプログラムに新しく看護学の領域に往復旅費支給の特別枠が設けられ、私はその第一回生として留学することになったのです。米国での学費、滞在費の工面にはミス・オルソンはじめ多くの方のお世話になりながら、最初の1年はシカゴの大学で学び、渡米2年目は「あしながおばさん」たちの地元のフロリダ州立大学で、生涯の恩師となったすばらしい先生方に出会い、週末は夢にみた「あしながおばさん」たちと過ごしながら、2年間の努力奮闘の末、BS in Nursing Education を得て1960年に帰任することができました。

それから40年を経て、1991年に11校だった看護系の4年制大学は、平成13年度には91校に、そして看護学の博士課程も11校を数えるなど、日本の看護教育は大きな変貌を遂げました。感無量です。ミス・オルソンに出会ったこととフルブライト奨学金を得たこと……これは単に一個人の幸せという問題ではなく、大げさに言えば、ミス・オルソンとともに改革に当たられた当時の大先輩たちに続いて、少数の看護のフルブライターも日本の看護の近代化に向けて役割を担った、私もその中で一役を与えられたのだと思います。

愛知県立看護短期大学（現看護大学）を退職した8年後、愛知医科大学

看護学部創設に参加し、平成12年4月に開設、再び教壇に立ち、目下若い先生方とともに、新しい世紀に向けて、より深い人間理解に根ざした真の看護のあり方を求めております。71歳の今、改めてミス・オルソン、「あしながおばさん」たち、そしてフルブライト奨学金制度に心から感謝し、微力を尽くしたく願っております。

留学生活を通して見たアメリカ

和邇 赳城 (1961GS、航空工学)

まず、背景として私の留学時期 '61~'62 のアメリカは所謂 Good old '60s' とされる豊かで、澁刺とした時代であり、アイゼンハウワ からケネディに政権が代わって二年も経過していない頃でした。留学先は東部アイビー・リーグに属するプリンストン大学で 町全体が大学を中心にした美しい公園のようで、近辺にアインシュタインも居た高等研究所、ギャラップ世論調査所、RCA の中央研究所等が散在し、教育、研究に相応しい素晴らしい環境でした。

大学の学部は3,000人程度の小規模な男子校で、大学院は600人程度、一方教官は約600人で少数精鋭の教育を目指していました。私の属した大学院航空工学科は、こじんまりしてはいるが飛行場まで具備していました。要するにプリンストン大学全体が富裕であり、マスプロ教育とは凡そ縁遠い余裕しゃくしゃくの姿でした。

これは、視点を変えれば、所謂東部エスタブリッシュメントが輩出した土壌そのもので、私自身が当時見聞したボストン、ニューヘブン、フィラデルフィヤ等も同じであった。少なくとも当時の日本のマスメディアは、余り熱心に日本に伝えようとしなかった所謂「ステイタス社会」が当時の一留学生としての私にとっては、現実のものでした。特にプリンストンの学部学生の排他的フラタニティ、気取り屋で貴族趣味なところ、有色人種へ

の所作とか態度等からアメリカ東部での「階級社会」の現存を実感したの
でした。この社会では WASP(White, Anglo-Saxon, Protestant)が最上位で
あることを暗黙の了解事項としていた。余談であるが、ハルバースタムの
「ベスト アンド ブライテスト」にその一端が活写されています。

次に留学生として当然経験する学業試験を通じて「独自の思考プロセスを
大切にする。」ことを身をもって体験した事は極めて印象的です。たとえば、
アインシュタインの数学助手でも有名なバーグマン教授の応用数学の試験
は3時間30分の closed book exam で、日本の大学では公式集を援用し
て(与えられたものとして)計算する問題を、定義から出発して、まず公
式を誘導し、それを用いて所要の計算作業に入るという大変なプロセスを
実行させるものでした。要するに、基本となる概念や理論をしっかり身に
つけた上で応用動作に入ることの重要性です。

最後に、私はアメリカ東部のある限られた地域、プリンストン、ニュージ
ャージイで留学生活のかなりの時間を過ごしましたが、プリンストンへの
往路、復路や、またクリスマス休暇や春休み等の旅行での、中西部、西海
岸の観察、経験から、アメリカは地域、各州などで気候風土はもとより、
風俗習慣、法律、制度まで、極めて多様であり、「アメリカの何々は」とい
った一般化 (generalization) は不可能であり、そういった言方をすると
誤解を招きかねないし、危険でさえあるという事を学びました。

留学を通して見たアメリカ

山本 恵里子 (1998RS、日系アメリカ人史)

アメリカとは、私の子供時代はまだ手の届かない大国であり、1960~70
年代に長期留学できる人はごく限られていました。外国とはあまり縁のな
い小さな町(松井秀喜選手の出身でもあります)で育ち、その後フルブラ
イト奨学金他の奨学金のお陰で、留学・研究の貴重な機会を得られたのは

大変幸運でした。

1980年によく留学が実現し、カリフォルニアのクレアモントという
白人が大半の大学院大学に入りました。まず学生の意気込みと積極性に驚
き、教授と討論を戦わせる姿から、アメリカの師弟関係や学問のあり方が
いかに違うかを実感させられました。授業、討論、またパーティでも、自
分の意見をしっかり述べなければならず、戸惑いました。次に印象深かつ
たのは、女性の活躍ぶりです。活発な女性の教授・大学院生たちは、励ま
しあいながら男性に負けじと、生き方を模索しているようでした。また男
性教授も、女子学生だからと手加減せず同等の期待をしてくださるのは、
性別役割の明確な日本とは対照的で、怖くもあり新鮮でもありました。た
だし後にハワイに移ると、もっと和気藹々とした雰囲気(アロハ・スピリ
ット?)がクラスにも街にも溢れ、風土の違いを感じました。

1998~99年、フルブライト研究員として UCLA アジア系アメリカ人研
究所に派遣された際に強く感じたことは、研究者が象牙の塔に閉じこもら
ず、社会の向上を考え、コミュニティと関わりながら研究していることで
す。例えば、歴史学者でもその研究を通し、社会的正義やマイノリティの
地位を向上させ、現状・未来に影響を及ぼせる、という信念がみられまし
た。特に(昨年9月に他界された)ユウジ・イチオカ先生からは、この点
にいつも感銘を受けておりました。

今や学生たちが気軽に長期留学できる時代になり、さほどハングリー精
神がないように感じます。80~90年代にみたアメリカは、私の中に生き続
け、今日も大きな影響力をもっているように思われます。

中部同窓会創立20周年に思う

高仲 顕
(留学年次1951～52)



はじめに

当同窓会も20年になると言うが私の心の中では、まだ、20年しか経っていないかという想いと、もう20年も経ったという懐旧の情とが輻輳している。同窓会ができた当時私は働き盛りだった。今年82歳を迎え第一線から引退し、その間、目が廻るような毎日を繰り返してきた。その一方で1982年と言うと私が留学生生活を終えて帰ってからでも32年も経っており、フルブライト留学生経験総数者もうなぎ上りに増えている。その間何の動きもなかったのは不思議にも思える。

話が自然と私事になるが、高齢のゆえに私の所属するクラス会や同期生会は解散や中止が多い。反面、同窓会の類は幹部の若返りが繰り返されている。要するに若い人は想いが将来にあり、同窓相集い昔を懐かしむというのは、ある年齢に達してからのことであると思う。だから、そんな機運の生まれる時期に本同窓会ができたのだろう。

ところで、本稿は初代会長として設立当初の事を書くよう編集者から私に依頼があったため書いている。今、このことをしておかないと当時の経緯は卑弥呼の事跡をさぐるようになるだろうとの思いがあったからでなかろうか。元来、私は古い書類はこまめに保存しておく方だが最近になるとどうせこんなものは孫の時代になれば反古として捨てられると考え思い切って廃棄するようにしている。その矢先、途端に懐旧記を求められ必要になるという皮肉にこのところ幾度となく出会っている。-----この

ようなわけで本稿の不備をあらかじめお断りする次第である。

同窓会結成の背景

昔を想う気持が若いうちには少ないということの他に、本同窓会結成にはきわめて世間くさい事実と高邁な思想が同居しているように思われる。そもそもフルブライト交換留学生制度の根底にある哲学はフルブライト氏自らの留学生生活の体験から醸成されたものだが、私が下手に解説するより同氏自身のメッセージをそのまま紹介したほうが強いインパクトを与えると思う。

“Educational exchange can turn nations into people, contributing as no other form of communication can to the humanizing of international relations, . . . I do not think educational exchange is certain to produce affection between people, nor indeed do I think that is one of its necessary purposes; it is quite enough if it contributes to the feeling of a common humanity, to an emotional awareness that other countries are populated not by doctrines that we fear but by people with the same capacity of pleasure and pain, for cruelty and kindness, as the people we were brought up within our own countries.”

現在テロに荒れ、敵意と憎しみに吹きさらされている世界に目を転ずれば、上記の信条が貫かれたプログラムに参加された諸兄姉は誇りと共にずしりと重く肝に銘ずるものがあるだろう。とどまるどころ、本プログラムは人類共生のために中絶してはならないのである。

世俗的一面と言えば、日米間の交流計画は1949年日本から50名という一方的派遣で始まったが、日本は占領下でありフルブライト・プログラムの予算がつかないため Government Aid and Relief in Occupied

Areas の予算の一部を流用したためガリオア留学生制度と呼称された。筆者はガリオアの第3回生だが帰国の前にサンフランシスコ条約が調印され、52年には両方の予算が使用されたため、同時に両方のプログラムが施行されアメリカからも17名の交換学生が来日している。それ以来予算は恒常的に計上され、プログラムの内容（派遣者資格や目的分野など）も拡大されていった。

しかるに1969年には予算は50パーセントに削減され、さらに諸経費の高騰を受け規模の縮小が止む無きに至った。これに対し79年には日米教育委員会が発足し両国政府が共同して事業を推進することになったが82年当時の見通しとしては、在来の日本人約40名、米国人約25名の実績維持は困難となった。これは最盛期の日本人250名平均に比べると激減と言うべきである。これを受けて東京では毎日新聞社長の山内大助氏を会長として同窓会奨学資金募集運動を展開することとなった。

中部同窓会設立のきっかけ

基金委員会は発起人62名をもって82年1月にその活動を開始し、各地に散在する留学経験者に募金に応ずるよう書類が発送され、これに応ずる人々も出てきた。しかし基盤をより強固にするため、82年（昭和57年）4月16日正午より名古屋アメリカン・センター（当時、東区高丘町ヨコタビル内）において、東海支部設立の趣旨説明と懇談会が行われた。当時日米教育委員会が住所を確認し案内状を発送したのは26名で、その中から11名が参加した。事務局側からは前記小山委員長その他、日米教育委員会より事務局長キャロライン・ヤン夫人と総務部伊藤智幸氏が来名した。

出席者は、後に設立発起人（当日急用で欠席したが趣旨に賛成の山本昂氏を加え）となったのが、石川進、岩野一郎、上田慶一、奥野信宏、柴田幸一、鈴木猛、鈴木敏明、千田純一、高仲頭、長坂源一郎、橋本富朗、山本昂の諸氏で、その後本会の運営に当り役員として活躍された方々であることは多くの方がご存知の通りである。出欠のとりまとめなど仲介の労を

とられたのは南山大学の長坂先生で、裏方の原動力となられたことを特記したい。

この機会にヤン夫人について語ると、キャロライン・又野・ヤンさんはハワイ生れの日系二世で、本土で修士号を得られたからピジョンでない本格的英語を駆使し、また、我々より本格的日本語で話された。台湾生れのご主人もフルブライトだが、東京転勤を機に夫人は日米教育委員会に入職、94年3月まで20有余年、まさにフルブライト・プログラムの顔であった。すらりとした長身で笑顔を絶やさなかったが、その政治力、外交力、行政力は並々でなく、彼女なくしては今の形のフルブライト・プログラムは無かったと言って過言でない。そして縁の下の力のごとく今日まで実務面に落ちなく尽くされた伊藤智幸さんに行き届いたお世話を頂いたことは数限りない。

生みの苦しみ

前記の説明会の時に配布された4月13日付の実行委員会よりの「貴地同窓会結成についてのお願い」の文書によれば、フルブライト上院議員来日が6月中旬に予定され、同窓会主催で昼食会を開催、招待するから5月末日までに設立するよう期限が切られており親切にも東京同窓会会則まで添付されていた。

これはなかなか急を要することであり、その間の打ち合わせや諸業務も大変と思われたが、説明会の解散直後、小山さんから「われわれは東海地区同窓会の初代会長には高仲さんを考えているからね」と耳打ちされた。これはまさに晴天の霹靂である。正直言って長坂先生の線の下話が進んでいると安心し出席していたからである。

落ち着いて考えれば会長や役員は会員総会が決めるものであるから彼の話は設立までの事務とりまとめをやってくれと言うことなら納得も行く。残された日数は少ないし、やる事は多い。それに私が専務理事をやっていた中部産業連盟は、いわゆる団体屋でセミナーや教育訓練プログラム、傘下の○△協会など幾つかの団体の世話をしている。したがって、人手と

ノウハウを持っているという判断であろう。そういったお世話をしている団体の中に Japan Chapter, Society of Advanced Management (日本近代化協会)がある。名古屋に本部があり、われわれが設立して事務局運営をしていたが、後には日本各地に Chapters が出来、小山さんには東京の会長もやって頂いたという因縁がある。ちなみにこの Society は歴史に残るマネジメント界の始祖 W. テーラーの名を取ったテーラー協会が改称されたもので現在も米国を本部に世界各国に Chapter がある団体である。だから高仲のところなら同窓会支部の事務などおてのこさいさいと思われたらしい。ともかく、設立までの事務処理に限るという了解でお引き受けした。

かけ足の同窓会支部設立

5月末までに発足するとなると、余裕は一月有余、やるべき事はあまりに多い。このような時の事務局の長にはオーナー社長が大企業で秘書室などを自由に使える人がよい。しかし、私は公益法人の専務で公務以外に人や場所や機材を勝手に使えない。おまけに当時の日記を見たら身内の葬儀3つの他、諸団体の役員と東京での JPC、JICA、APO など国際事業でほとんど地元にはいない。ともかくいろいろな手だてや発起人の方々の積極性に支えられ4月21日、5月15日の打合せ会を経て5月21日、愛知会館において設立総会に漕ぎ着けた。住所が判明し案内状を出したものの227通、無回答が63名で当日の出席会員は58名であった。

特記することは、同窓会の名称が出席者過半数の意見により、中部同窓会として変更された。その後1984年の総会で当然のごとくに国際部長の長坂先生に会長をお引き受けいただき、以後円滑に今日まで活動が続いている。

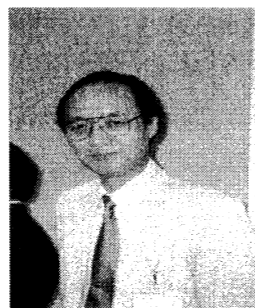
本会の設立はジャパントイムスや地元紙にも報道されマンスフィールド米大使よりの祝辞受領、フルブライト氏の歓迎会出席などがあったが、会員名簿の作成発行、G/F News の発刊、中間行事としての会員例会(室伏女史のチンパンジーの知的構造のお話は好評であった)、などが全国的

な合同行事の間を縫って進められた。本来の同窓会結成の目的である国際基金募集は数次にわたって行われるなど、まことに目まぐるしい設立当初の2年間だったのである。

カルチャー・ショック

今光廣一

(留学年次1951～52)



留学生として初めてアメリカの土を踏んだのが丁度50年前、日本からの戦後最初の大型客船の到着とあって、シアトル港の栈橋は鈴なりの人だかり。全部カルチャー・ショック外人ばかり。当時の日本では、アメリカ兵は見かけてもこれだけ大勢の民間人を見るのは初めて。いきなり外国映画の中に紛れ込んだような錯覚に襲われる。これが外国なんだ、そうだアメリカに来たんだ、という実感が胸にわき上がる。これがアメリカでのカルチャー・ショックの始まり。

日本では、原子爆弾で広島と長崎が壊滅してしまったというのに、こちらでは「リメンバー・パールハーバー集会」があちこちで開かれており、間違っただけで日本人留学生にも招待状が来たりしていた。日本からの留学生には一人ずつFBIがつけられて、その行動は監視下におかれ、不審な行動があれば、ただちに本国へ送還するとゆう通知もあった。黙ってやらない所はアメリカらしいと思ったが、アメリカ政府にしてみれば、戦後間無しの日本からの留学生の中に神風特攻隊の生き残りがいるのでは、と警戒していたのかもしれない。

しかし留學生活は快適で、近隣の町や支援機関からの誘いも多くあって、夜に一人で食事することは少なかった。私が学んだオハイオ州立大学はやたらと広く、学内に飛行場(航空学部付属)まであって、市バスが学内を走っており、車なしでは教室の移動もままならぬアメリカの大

学の規模の大きさに辟易した。アメリカの学部はcollegeとして独立した存在であって、universityとは多くのcollegeの集合体の意味を持ち、学生は自分でカリキュラム(どんな授業をとるのか、どんな組合せにするのか)を作って、カウンセラーの教員によるチェックと承認を経て完成する仕組み。大

学内のどの学部の講義も原則として聴講可能であり、単位も一定限度までは認めていた。日本の大学のトップダウン型定食方式に比べ、個人主義・自由主義とはこういうことかと悟った。今でもそのように行われているのか、当時アメリカの他の大学でも同じ事が行われていたのかはわからない。

同期の留学生で評論家として活躍中の竹村健一氏が指摘されているように、日本人の常識は、アメリカでは反対概念に回る。ここに日本からやってくる留学生が受けるカルチャーショックの源がある。キリスト教的な倫理観の強いこの国では、ウソを非常に嫌う。しゃれたネクタイをしていたアメリカの友人に、どこで買ったのかとお世辞半分尋ねたところ、どういう意味だと怒りだした。それは人のアイデアを盗もうとする行為で許し難いというわけだ。真実は異なっていると思われるが、日本の芸道やときには学問研究にも見受けられる真似ることイーコール学ぶことと考える日本人と、真似ることイーコール盗むことと考える欧米人との価値観の差は大きい。

フルブライト留学と私のルネッサンス

藤本文弘

(留学年次 1964-65)



The Fulbrighter in Chubu の原稿を頼まれて何を書くか迷ったが、11月の20周年例会でいろんな留学があることを再確認したので、私も素直に自分の経験を中心に1つの文にまとめることにした。当時の日記を読み直しながら、こういう留学もあったということで、私の経験、及びその流れを新しく感じている現在、若干思うことを述べさせていただきたいと思う。

1. なぜフルブライトに応募したか

1959年に大学を卒業して農林省に採用された私の最初の職場は、九州農業試験場だった。まだ農業で増産が望まれる時期であり、試験研究機関の仕事で社会貢献ができると期待して赴任した私だが、研究室での生活は物足りなかった。ちょうどその頃、日本で需要の伸びが見込まれていた砂糖のてん菜(砂糖大根)による生産を、北海道だけでなく九州でも起こそうという政策が打ち出され、熊本に研究所が新設されたので、私は希望してそれに転出した。新しい研究所は若々しい雰囲気楽しかったが、まったく新しい作物の育種に取り組む仕事は、日本では方法論的なノウハウが低かった。そこで先進地に学ぶために、当時はまだ理科系にも開かれていたフルブライト留学に、上司にも無断で応募したが、意外にも合格してしまった。

当時、理科系はトラベルグラントだけであり、アシスタントシップを得なければならなかった。苦勞したが成功せずあきらめかけたが、フルブライト委員会の斡旋による地域財団からの若干の奨学金を得て留学は可能

になった。このような財団があったことはありがたいことだった。一方、熊本の研究室としては事業的仕事もあり分担問題があったが、研究所長が適切な采配を振るい、寛大に留学を許可していただいた。継続して基本給が支給されることとなり、生活費を確保できた。ただ、家族を連れて行く経済的余裕はなく、妻と1歳の娘を日本に残さねばならなかった。ホームステイで娘の写真を見せると、ご夫人方に「こんな可愛い子をおいてよく来られましたね」と言われたものだった。私はそのとき29歳で、コロラド州立大学農学大学院への入学は、外国生活としては始めてであり、また、今思うと最初の社会人入学でもあった。

2. 留学生としてアメリカで学んだこと

1964年8月2日からの1ヶ月は、ハワイ大学でのオリエンテーションで、同期のフルブライターたちと一緒にだったので日本気分が抜けなかったが、最初のホームステイは、ハワイでの12日目にカウアイ島へ飛び、Mr.Hansonという普及所勤務の農業助言者の家庭だった。

Hostは飛行場に車で迎えに来てくれた。彼とその夫人ともに口数は多くないが、気軽に話ができる人で話題もあってよかったが、他の家庭を訪問する時間を聞き漏らして準備していないなど失敗も多かった。「始めて日本語のまったく通じないところに一人ほっぽり出されて、自分ながら英語がうまく使えないことを痛感した。」とその日の日記に書いている。それでもHostのMr.Hansenをはじめとする多くの人との対話、彼の案内による熱帯作物試験場、広大なサトウキビ農場の見学などから、私の実質的な留學生活が始まった。

目的地のコロラド州立大学は、デンバーからバスで約2時間のところにあるロッキー山脈地帯の学園都市フォートコリンズにあった。アジア系の多いハワイやカリフォルニアと異なり、ここは全くの西部であり、私の予期を越える広大なフィールドと自然の美しいアメリカ西部だった。到着後まもなく、研究室タイピスト女性の家族たちと行った1万2000フィートを越すロッキー山脈国立公園に通る道路、それに沿って続くアスペン、樅、針葉樹などの黄葉の黄金色と濃い緑の織り成す美しさは今も忘れられない。

大学院の講義では日本では学べない生物の遺伝・育種に関する基礎的な考え方、統計学の実際を学ぶことができたのが大きかった。たとえばDNAなどは日本での学部授業で学んでおらず、ここで始めてその重要性を知った。個人的には USDA・ARS(農務省農業奉仕局)の研究室に机が与えられ、博士論文を書いた直後の若い研究者と仲良くなり、突っ込んだ討議もできた。学内の遺伝関係研究者のセミナーに出ると、植物・動物を問わず研究室・部門を越えて多くの参加者があり、熱心な討議が行われているのに驚いた。1ヵ月後日記に、「この留学は私にとってルネッサンスだ」と書いているが、よく動き、率直に語るアメリカ人の中での生活に、古い自己が崩れつつあることを感じていた。

しかし、社会人入学の私が他のフルブライターたちと異なっただけは休暇の過ごし方だったと思う。冬の休暇中の訪問地にフルブライトのオリエンテーションで教えられていた ISS (ニューヨーク) へ手紙を書いて、ホームステイをセットしてもらった。九州農業試験場の年長の友人が科学技術庁経費で同じ大学に留学に来ていたので、二人で12月14日にフォートコリンズを出発、1月4日まで20日間余りをコロラド州からワシントンDCまで、往復5000kmを越えるバス乗り継ぎの旅をした。熊本での英会話先生の自宅が1つあったほかは、すべて田舎の全く未知の家庭に泊めていただいて日本のスライドを見せたりして交流したが、宿泊用に子供の部屋を空けていただいたりして歓迎して下さった。農家の場合が多かったが、400haを越す大農場では、大きな機械を使って主人一人ではほとんどの仕事をこなし、天気の都合では夜ライトをつけて仕事をすることもあり、日曜には、天気がよくても仕事はせずに家族そろって教会へ行く。我々二人も一緒に行って礼拝に加わった。哲学的にあまり深い話は聞けなかったが、農村地帯におけるアメリカ人の素朴さ、善良さと働き者ぶり、初めての外国人も気軽に受け入れるボランティア精神の強さは、日本の農家ではほとんど考えられないことだった。アメリカの農業を支えている生の肯定、人間性への信頼感を、この旅で素朴な生活の現場から深く教えられた。

春休みと夏休みには、USDAと製糖会社の研究所を一人で訪問して回った。コロラドの研究室からの紹介があったとはいえ、何の学位も業績もな

い若い留学生に、仕事盛りの研究者が対応して詳しい説明と質問に答えてくれた。USDAの研究機関には数日間滞在して、研究会に参加することもあった。彼らは外来の研究者をも対等の人間として受け入れ、その問題に応えようとする、すなわち、人間としての認め合いの心を持っていることを私は感じる事ができた。さらに彼らが、その研究論議を通して、自らの研究に自信と自負を持ち、農業生産を支える喜びを持っていることを実感できたのは、何よりも大きなことだった。

日本では研究機関に配属されたが満足できず、仕事の行き詰まりから将来に迷いが生じていた私だが、このアメリカの研究者たちとの交流は、私にとって研究への意欲と生きる力を引き出してくれるものだった。英語の文献や基本的著書を読む習慣ができたことは私に自信を与えてくれた。また無理をしても重要な原著は必ず読むことを学んだ。仕事の上から留学期間の延長はできず1年で帰国したが、この留学期間を通して私は、農学とくに植物育種研究に集中する生き方の基礎が確かなものになった。

3. 作物育種研究から退官後の社会人入学へ

帰国後は、留学で得た考え方、方法論を生かしつつ研究所内での私の仕事の方向付けを確立できた。てん菜の育種研究の成果をまとめ、5年後には論博で京都大学から学位を取得できた。

てん菜の研究は終わったが、さらに農林水産省と愛知県を往復してマメ科牧草の導入育種研究の仕事が続けることができ、日本草地学会賞を受けるまでの仕事の展開になった。勤めの終りには岐阜大学教授として遺伝資源学のちに多様性生物学を担当したが、ここに赴任してしばらくしての親睦会の挨拶で、コロラド州立大学での留学期間に戻ったような気がする。述べたことを今も覚えている。マメ科の帰化植物を西日本の各地で若い人たちと追いつきながら、フルブライト時代の新しい世界との出会いが戻ってきたのが、岐阜での6年間であった。

退官後に非常勤講師として「生物学」のほか「自然科学概論」を教えることになって、科学とは何かを語らねばならなくなり、自分の足りなさを強く感じるようになった。上述のように私がフルブライトで学んだのは、

単なる知識ではなかった。自然と人との交わり、科学者の生きる姿勢を語らなければ科学を語ることにならないのではないか、それには科学の歴史を学ぶ必要があると感じた私は、一昨年春、愛知県立大学国際文化研究科に社会人入学した。私としては2回目の社会人入学である。フルブライトのときのような成果が期待できるだろうか。

「私が人よりも遠くまで見ることができたとしたら、それは巨人たちの肩に乗ったからである」というニュートンの言葉を修論テーマの出発点とした。愛知の自宅へ戻り、読書時間も多く与えられるようになって、英米の科学史研究者たちによる著書の深さに科学革命を中心とする歴史の重要性、歴史の意味を強く教えられている。それとともに、このフルブライトの経験もその1部だが、自分の歴史と自分自身を再発見する学びになってきた。これもまた私のルネッサンスではないかと思う。65歳の手習いから、ヨーロッパではルネッサンス、リフォーメーションに続いて、なぜ科学革命が起こったかについて考えるように導かれ、ケプラー～ニュートン～ダーウィンを結ぶことに修論の焦点を絞ることにしたので、修士論文の完成をもう1年延ばすことになった。しかし、チャレンジの楽しみは大きく、気持ちが若返る。最近、日本では若い人たちのチャレンジ精神の不足と生きる力の低下が問題となっており、私自身も講義のときにその危機を感じてきたが、もし私たちが新しい生命力を取り戻しうるとすれば、それは人間の歴史、とくに現代文明を展開させた科学における思考革命にもっと目を向けることが必要ではないか；一人一人の歩みは異なるが、求めるところは同じいのちを見出すことではないか、と思うこのごろになっている。

想い出すままに

吉原道子

(留学年次 1967～90)



フルブライト交流計画50周年と聞いて、1ドルが360円という時代に緊張して羽田を出発した私の様子が思い出されます。最初の目的地はペンシルバニア州にあるバックネル大学でした。当時その大学の英語のトレーニングコースでは、世界の数十カ国から来た100人以上の留学生が、7,8月の8週間を同じ寮で寝食を共にしながら英語の学習に励んでいました。教室やLL教室での授業以外に、ホワイトハウス、最高裁判所、国会議事堂、アーリントン墓地、ゲティスバーグ古戦場、ジョージ・ワシントンの生家、ハーシー・チョコレート工場、美術館などへのバス旅行もあり、他の留学生と一緒に愉快地過ごしました。その頃を思い出しながら全員の写っている記念写真を開けてみました。私の隣に写っている学生はおどけた仕草をして、公園の噴水池に落ちこち、ずぶ濡れのままバスに乗ってきた陽気なイタリア人です。ポケットから小さなカーペットのようなものを取り出し、突然ひざまずいて祈りを始めたイスラム教徒の学生や、食事の時は皿の上のものを指して、「これは何か」と何時も尋ねながら、肉類だけは絶対に食べなかったルームメイトのインド人も写っています。彼らは自国の有名な遺跡や、一般にはあまり知られていない所へ私を案内したいから、是非何時か来ないかと何度も言っていました。バスの中では、スウェーデン人とドイツ人と私の3人は、何とか英語を駆使しながら話題はヒトラーに至るまでよくおしゃべりしました。旅行中は、アメリカ人の家庭に1人か2人ずつホームステイすることもありました。私たちを家族の一員

として迎え、お互いを出来るだけ知ろうとするアメリカ人の厚意には本当に感謝しました。また彼らが自分の考え方に従って、何事にも粘り強く努力することを子供の頃から実行しているのには感心しました。終了後、私たちは別れを惜しみながら、各自の目指す大学や研究所へと向かいました。私にとってはそれからがいよいよ正念場でした。

帰国以来開けたこともなかった数冊のアルバムを見ていると、勉学に、研究にとお互いに助け合いながら、すっかり疲れた日々を一緒に過ごした人々が次々と思い出されます。このような機会に恵まれて有意義であったと感じるのは、民族、国籍、言語、宗教、文化、習慣などに多様な背景を持つ人々と「信用」できる関係を築き上げていく体験をしたことでした。

フルブライトプログラムでの留学の

前後 10 数年

熊野善介

(留学年次 1989-1993)



フルブライトプログラムでの留学への挑戦は実は 1977 年に遡るのである。当時小生は、仙台の教育大学つまり宮城教育大学の高校教員養成課程で、東北大学理学部地質学流の教育を受けていた。そして、指導教官である増田孝一郎教授のもとで古生物学や地質学の指導を受けながら、先生の薦めで、ミネソタ州のマカレスター大学に国費留学していた。今思い起こせば、この 1 年間の留学がフルブライト留学への挑戦の始まりであった。

不思議なもので、マカレスター大学には、2001 年の夏に静岡大学の事務局の皆さんと、大学運営・経営の調査のために訪れ、プロボストに会うことが出来、多くの貴重な示唆を受けた。小生が勉強をしたころと比べていろいろなところが新しくなり、入学することもより難しくなるだけでなく、リベラルアーツの 4 年制大学として、全米でもトップレベルになっていた。この 1 年間 (1976 年から 77 年) は勉学に明け暮れ、テニスに明け暮れ、今だに手紙のやり取りをする親友ができた。その一方で、アメリカの高等教育のすごさを思い知らされ、大学院教育はアメリカで受けたいという願いが膨らんでいった。仙台の教育大学にもどり、半年で卒業論文をまとめあげ、マカレスター大学からいただいた 30 単位をすべて単位互換でき、日本での学部教育を 3 年間だけで卒業したことになる。

その後、筑波大学大学院に進学してみたらという指導教官の薦めのまま筑波大学に進学した。積極的にネイティブの先生の語学の授業を取った。そして、フルブライト奨学金を得て留学することへの挑戦が始まったのである。特に指導教官になっていただいた、中山和彦先生の影響は大であった。先生が日本政府の仕事で、環境教育関係の国際会議に参加されていた

からであった。アメリカで研究したいという思いが膨らんでいた筑波大学大学院の2年目に、横浜国立大学から長洲南海男先生が筑波大学に赴任された。このお二人の先生にフルブライトプログラムでの留学に際して大変お世話になった。筑波大附属駒場で非常勤講師をしながら、フルブライト大学院プログラムに挑戦し合格することができた。しかし、同時に茗溪学園の教師として採用通知を頂き、悩み抜いた結果、教師になることにした。このとき留学していたら間違いなく、人生は異なったものとなっていたであろう。この9年後再び合格し、家族（5歳と3歳の息子と妻）を連れ留学することになった。この過程で当時フルブライト委員会の留学カウンセラーをなさっていた小松先生に大変お世話になった。筑波大学の長洲教授がアイオワ大学を訪問なさったこともあり、一連のプロセスを経てアイオワ大学博士課程に進学することになった。

アイオワ大学では科学教育センターが独立しており、当時12名の教官がおり、教授レベルは数億円の研究費を有していた。小生の師匠であるRobert E. Yager教授は3つのプロジェクトを持ち、それぞれ別々の秘書を抱えていた。毎週水曜日の大学院のゼミナールでは、アメリカ国内での話題の研究者に、議論を挑むことが出来た。日本の理科教育学の研究室では到底信じることのできない研究環境であった。その上、いろいろな国からの留学生が集まり、常に世界各国の科学教育事情を手に入れることも容易であった。そのような中でフルブライト奨学金を2年間も得て挑戦できたことは幸いであった。

日本にもどり、学位論文を書き終えつつある1993年の4月から静岡大学に着任することができたが、約2年間かけたアクションリサーチのデータを携えて約4ヶ月間アイオワ大学に戻り、指導教官のYager先生宅に泊めてもらいながら学位論文を纏めることができた。しかも、この論文は英文のまま科学研究費の補助金を得て、出版することができ日本全国の多くの大学の研究者に謹呈することができた。その後、フルブライト関係では、オハイオ州立大学名誉教授のVictor Mayer先生が1999年に静岡大学にフルブライトプログラムの上級研究者として静岡大学と国立教育政策研究所を約3ヶ月間訪れ、「グローバル科学リテラシー」に関する研究をなさっ

た。この研究の成果もオランダの出版社から、2002年の2月に出版することができた。日本の理科教育全般の問題点や良いところが見えるようになり、10年間の中でいろいろな研究、とくにアクションリサーチを行ってきた。レフリー付きの論文や著作が40本を超えることになった。また、教え子も毎年5人から6人の卒業生、修了生ができ、やっと、アメリカの博士課程に1人送り出すことができた。研究室での研究環境、教育環境も毎年向上している。小学校の理科の教科書作成にも携わり5年目になった。全国の先生方が何を問題視しているかを知ることが、とても勉強になっている。しかし、アメリカで進められている教育改革のあり様を見てしまっている者としてはまったく満足していないどころか、少々ストレスが増大しているといった方がいいであろう。一方で、国家レベルの研究に携われたり(TIMSSのビデオ研究や評価規準の作成)、アメリカのCBE (Council for Basic Education) から委任経理金を頂き、HP上での教師教育(SAWプロジェクト)を展開したり、JICAのインドネシアの初等中等教育拡大プロジェクトに関ったりしている。また、カナダとの共同研究も科学研究費を受けて始まった。このような研究活動を進めていく中で、フルブライターに会うことも多く、アイオワ大学科学教育センターの同窓の外国人に会うことも多い。

現在の自分が在ることが、フルブライトプログラムのお陰であることに感謝しつつ、自分の目指すものがかつてのアイオワ大学科学教育センターのような研究環境、教育環境を日本のどこかに作ることだと見えてきた。日本の各地で独立法人の大学が生まれていく過程で実現可能かもしれない。後8年は挑戦し続けたい。その挑戦の中で、フルブライト氏の哲学を少しでも広めていく使命があると肝に銘じている。

(アイオワ大学1989-1993、現職 静岡大学教育学部助教授)

チャイナ・タウンの光と影

平岩恵里子
(留学年次 1994-95)



故フルブライト上院議員が逝かれたのは、ちょうど私がニューヨークに滞在していた年でした。何かの巡り合わせのような気がしてじっとしてられず、せめてご葬儀の場に行き、私なりのお礼とお別れを言うつもりでワシントンに出かけたことを今でも思い出します。当時、フルブライト留学生をはじめ、ニューヨークへの留学生の手助けをしていたメトロ・インターナショナルのステイシーさんから、「クリントン大統領（当時）に会う機会があるから、“フルブライト交流計画はとても大切なプログラムです、これからも続けて下さい”ってお願いするのよ！」と言われて「！？」。言い回しを何度もおさらいしたのに、イザその時になると――。情けない私とその後のプログラムの差し障りにならなかったかどうか、ここ数年息を潜めていましたが、もうその心配は無いようですので実はホッとしています。

米国滞在中、日本では阪神淡路大震災、サリン事件と、大きな出来事が続きました。その時の、外から日本の出来事を知るもどかしさと同じようなものを、一昨年の9.11以来ずっと感じ続けています。行って自分の目で確かめる勇気もなく今日までできてしまいました。様々なことが頭を駆けめぐりますが、それにしてもあのチャイナタウンはどうしているだろうか……。

80年代末から90年代にかけて、日本では外国人労働者問題がしばしば論争のテーマになっていました。そんな中で通い始めた社会人大学院で

出会ったある国際労働移動の論文に感激し、速攻（！）修士論文を仕上げたのがフルブライト留学の始まりでした。渡米するのならその著者のいる大学へ、との思い込みが叶えられ、初めての海外暮らし（そもそも一人暮らしが初めてだった）で経験する“アイデンティティ・クライシス”の真ただ中、手探り状態でとにもかくにも始めたのがチャイナタウン通いでした。当時、中国からの移民は南米からの移民とともに急増しており、チャイナタウンをめぐる地域はレストランなどのサービス業、あるいはN.Y.のファッション産業を支える縫製工場で、合法・不法を問わずに多くの人々が働いていました。そんな彼らが働く環境は決して恵まれているとは言えず、低賃金、長時間労働は日常茶飯事、悪くすると賃金不払いの憂き目にあう人々も多いようでした。雇用側がピンハネしているとはいえ、エリス島に展示されていた移民ラッシュ当時の求人広告、その給与面に載っていた時給と中華料理店で働くウェイトアの時給とがさして変わらないことに驚きもしました。移民二世の、若く教育も受けた世代が組織した中華人職工組合はそうした現状を打開しようと、当時から盛んに活動していました。大学や市民集会の場で機会あるごとに問題点を訴え、政府当局にも働きかけていました。ピケも世論を喚起する大切な戦術で、私は生まれて初めてそうしたピケに参加し始めたのですが、ノンポリ世代の代表のような私にとりそれはとても不思議な経験でした。市警察第五分署前の、チャイナタウンでも一、二を争う中華料理店。組合の人々と一緒に、そこで働いている中国人も当然こちらのピケ側に参加すると思っていると、彼らは彼らのボス、つまり敵であるはずの雇用者と一緒になってレストラン2階窓から私たちに向かって「帰れ、帰れ！」コール。低い賃金でも働きたい予備軍はわんさという彼らにとって、こちらの側に来てしまうと即刻ボスから「クビ」が言い渡されてしまう。ニューヨーク大学で移民研究をしている教授の、その時の一言がそのまま私の中で消化されずに今も残っています。「彼らは階級闘争をしているんだよ。」

移住先で自国同士の人々が階級闘争をする、そのエネルギーに圧倒されてから、チャイナタウンを、そして移民そのものを見る目が変わったよう

に思います。隣接するイタリア街区がチャイナタウンの勢いに押されて活気を失いつつある、というのも頷ける現象でした。人々は国を越えて移動する時に、彼らを取り巻いている空間のようなものも引き連れて移動をする。それが文化や民族性と言われるものかもしれないのですが、そうしたものとも少し違う気がする。世界中の人々を魅了してやまないマンハッタンの雑踏には、あらゆる人々が持ち込んだそれぞれの空間がギシギシとひしめいていて、その摩擦が生み出すエネルギーが発酵しながら発光している。極上の中華料理が放つ香りと、裏階段のすえた臭いとネズミとごきぶり。その光と影は、あれからどうなっているのだろう。今もたくましいままにいてくれるだろうか。

フルブライト奨学金を得ることができた、そのお返しを私はまだしていない。そのことをずっと、心のどこかで後ろめたく感じてきました。今取り組んでいる移民分析の博士論文を形にすることができれば、少しはお返しになるかもしれない、おくれればながらそんな気持ちでいます。できればそこに、あのチャイナタウンの光と影とその空間、そんな諸々を盛り込むことができたなら…。

最後に、私もマンハッタン生活の楽しかったことをぜひ一言披露させて下さい。当時、近くに住む日本からの友人を得る機会に恵まれて、彼女とともにマンハッタンを歩く楽しさ、チャイナタウンで蟹をほおぼる楽しさ、イーストリバー沿いで花火を見る楽しさ、ナパバレーワインの試飲会でケチをつけながら飲み歩く楽しさ、お金がない時はそれなりに（もちろんあればあっただけ）楽しむ方法を学んだのでした。今でも、私のとても大きな財産です。

今度こそ最後に。このエッセイを書く機会を与えて下さったこと、本当にありがとうございました。恩返し、ほんの少しをさせていただいた気がします。

会員便り

“私のフルブライト時代”

○ 多田尚夫 (1950, Purdue University)

1950・51年の GARIOA 1 回生として Purdue 留学です。戦後5年目で日米の社会的な格差に強いインパクトを受け、1年間無我夢中で過ごした記憶が50年経っても残っています。古きよきアメリカが懐かしく思い出されます。

○ 興津達朗 (1952, University of Michigan)

1950年代前半の活力と寛容とに満ちたアメリカの留學生活は私にとって貴重であった。専門分野の代表的学者の研究、教育、学界の現状把握によって、国内における机上の研究とは異なる豊富な知識、広い視野を得ることが出来た。

○ 山田豊太郎 (1952, Wayne University)

デトロイトで過ぎしましたが、自動車の町だけあって、工場がすばらしかった。見学もし、勉強になりました。

○ 福島 穰 (1954, Morrissania City Hospital)

昭和29・30年のことです。昭和32・37年の5年間、今度は自費で米國留学しました。私の人生に測り知れない影響と刺激を与えてくれた「充実したアメリカ生活」でした。

○ 猪飼公郎 (1955, University of Pennsylvania)

1956年ペンシルヴァニア大学留學中に結婚、二人の娘（ハーフ）長女は女医で、旦那（CT、MRI 専門医）とシアトルに在住、二女はブラウン大学同窓の旦那とプロヴィデンス在住。長男はブラウン大学を卒業してボストンでインターネット会社、次男はボストン大学と、結局はフルブライト留學

が原因か？

○白岩謙一 (1956, Princeton University)

アメリカ往復は氷川丸のキャビン・クラス、アメリカ国内はプルマン・カーと豪華な旅をプレゼントしてもらいました。プリンストン大学の大学院での生活費は月150ドル程度だったように思いますが、特に困ったことはありませんでした。‘56～’57はプリンストンで、‘57～’58は研究助手としてコロンビア大学でした。

○本田実浄 (1956, University of Michigan)

私が渡米したのは1956年度でしたので、約50年前のことですので、若く、若々しく希望に燃えていた時代のことですので、その思い出は今でもきわめて fresh なものとして残っております。大学の仕事で2回程渡米(2回とも加州)。健康がゆるせば第2のふるさととしてもう1度行ってみたい。

○若井一朗 (1957, Albany Medical College)

1957～1959年の米国は信仰の篤い礼儀作法のしっかりした、しかも個々人の向上心の強い、民主主義の完成度の高い理想的な社会でした。共産主義世界社会と競争の上で、1つの目的、理念に向かって指導理念が明確でした。現在の理念の失われた世界と対比的です。

○角岡秀彦 (1958-61, Quincy City Hospital, Springfield Hospital)

ボストン近郊のクインジー市立病院でインターン (1958-59)、スプリング・フィールド市のスプリング病院で外科レジデント2年。外科レジデント2年の終わりに「2年後の Chief resident を約束され」、その旨、大学医局の教授に伝えたら「帰国せよ」と言われ、泣く泣く教授命令に従いました。米国の最も強き、よき時代に留学した経験を時々思い出し、当時修得した基礎的医学手法が今でも役立っております。

○井改實 (1959, University of Maryland)

1959年夏オリエンテーションを受けたインディアナ大学で初めて転がしたボウリング (のボール) を70歳過ぎてから、思い出したように始め、今では average 160程度にまでなりました。

○尾島昭次 (1959-61, Yale University)

米国で世界への眼を開かれました。ガンの研究が目的でしたが、進んだ教育意識をシステムに大いに感銘を受け、教育改善への動機付けとなりました。

○岩崎秀一 (1959-61, Washington University)

40数年前、セントルイスのワシントン大学で分子生物の研究をしました。良い先生、よい環境。なつかしい思い出です。その後の研究生活にとってもプラスになりました。

○木村克美 (1960, Cornell University)

私は29-31歳の2年間、フルブライト研究員として留学し、物理化学の研究に従事しました。国際的な研究の場で、国際的な感覚身につける絶好の機会でありました。そばにノーベル賞受賞者もいて、とても緊張し、また楽しい2年間でした。その後40回以上外国旅行と国際学会や欧米の大学で講演してきましたが、その基礎はフルブライト研究員時代の貴重な経験によるものと感謝しています。私の家族も一緒に (当時4歳と1歳の子供と)、アメリカの家庭にもよばれ、驚くことばかりでした。(コーネル大学化学教室1960-62年滞在)

○植下 協 (1960, Northwestern University)

1960年のフルブライトとしてイリノイ州エバンストンのノースウエスタン大学で、1年間リサーチ・アソシエイト生活をいたしました。今日ほど国際交流が進んでいなかった当時の日本では学び得なかった多くのこと (考え方、生き方など) を、先進社会の米国で学んだことが、その後の私

の人生に色あせることなく役立って、今日に至っております。当時の米国の敗戦国の若者に対する思いやりに感謝でした。

○ 白戸紋平 (1960, University of Houston)

1960年9月、氷川丸の最後の航海、2週間でシアトルへ。到着してまもなく受け入れ先のヒューストン大学 Dr. F.M.Tiller 教授と一緒に NSF から \$43,500 という当時としては巨額の研究費を頂戴し、地方新聞各紙にも報道されて、在住の一世、二世の方々から祝福されました。早々に化学工学科教授に任用されましたが、日本での講座担当の教授のご定年で、滞米1年で帰国しました。その後も度々ヒューストン大学を訪問し、互いに交流しあうことが出来ました。今ではお世話になった下宿先は見知らぬ人に代わり、また毎日慣れ親しんだ研究室の建物が立派な建物に建て替えられ、人びととも段々に疎遠の傾向で、懐かしくも寂しい思いです。しかし、何か専門でお役に立ち学ぶことをと、毎日を務めております。

○ 小塚 徠 (1962, University of Michigan)

ミシガン (アナーバー) で勉強していた 1962 年秋、キューバ危機があって、学生も教授も一週間位はそのことについての心配に集中して、大変な時間をすごしたことを憶えています。

○ 飯田忠三 (1962-64, Harvard Medical School)

ニューイングランドの四季と研究室の毎週木曜日の深夜におよぶ討論は、ともにすばらしく、強く印象に残っています。また、ケネディ大統領が暗殺される場面をテレビで観たのはショックでした。

○ 田中春美 (1963-66, Brown University)

1963年8月から、フルブライトで旅費を頂戴し、New England の Brown 大学 (RI.州、プロヴィデンス市) の大学院に留学、言語学を勉強しました。その後1年半延長し、PhD 論文を書く資格を得て、1966年1月に帰国しました。Brown 大学での生活は周囲の人たちに大変親切にしてもらい、

楽しい思い出ばかりです。1966年1月、プロヴィデンス郊外の空港から飛び立ったとき、2度と来られないかもしれないと、涙が出た記憶があります。言語学科の先生方3人も見送りに来てくださいました。

○ 江口昇次 (1964-66, Johns Hopkins University)

1964年8月、ハワイ大学 East-West センターで米国生活のオリエンテーションに参加できた。総勢14名で二人ずつ学生寮に宿泊し、英語レッスン、文化・歴史、の講義のほか、博物館、名所見学など実に豊富なメニューで、情熱あふれる教官たちによるまさに特訓で、厳しくも楽しいオリエンテーションであった。医学、化学、高分子化学、物理学、地質学など理工学系研究者に、文学研究者、版画家、バレリーナなどの芸術家まで多士済々のメンバーゆえに、フルブライト相互の異分野交流も出来、修了後、それぞれの訪問先へ、たとえば小生はボルチモアの Johns Hopkins 大へと、英語にもある程度自信(?)をもって出発できた。為替レート 1\$ = ¥360 で外貨持ち出しも \$200.00 までと制限があった時代、\$12.00/日の支給はありがたかった。これも今は大変懐かしい思い出である。今日、日本が受け入れている多くの留学生を見ると、われわれはこのように迎え、処遇・対応しているであろうか?

○ 藤吉徳和 (1966, University of Michigan)

1966-67 年は、ミシガン大学から C.C.Fries 教授が去った直後でした。日本の英語教育に役立つ何かを得られるのではと・・・期待したのですが、残念でした。映画「ドクトルジバゴ」を原語で何度も見入ったなつかしい思い出がございます。

○ 古橋 總 (1966, University of Indiana)

研究環境はしっかりしていました。住居(寮)は満足すべきものではなかった。食事は量的には全く満足すべきであったが、質的には日本人にとっては、とくに口に合わなかったものが多かった気がします。

○ 小田 海平 (1967, University of Colorado)

ヴェトナム戦中で、キャンパス内外の反戦集会・デモなど繰り広げられていたのを鮮やかに思い出します。米国の大きさ(自然、物資、ふところなど)には目を見張った。個人的には、陸上競技部員といっしょにトレーニング、競技会参加をしたのは忘れがたい貴重な経験だったと思う。

○ 金子義一 (1968, University of Michigan)

6ヶ月の期間でしたが、最後の大陸横断の旅が特に思い出深いものが多い。

○ 奥野信宏 (1976, Stanford University)

苦勞したことから楽しかったことまで、全部が今の財産になっています。

○ 塚田 守 (1981, University of Hawaii)

大学院での専攻を社会学に変更して初めてコンピュータを用いた勉強は新鮮でした。まだ大型コンピュータが主流の1981年のことでした。

○ 高井次郎 (1994, University of California, Santa Barbara)

カナダで育ちましたが、カリフォルニアに2年滞在してアメリカの他文化への認識の高さに感動しました。個性を尊重し、多様性を歓迎する姿勢には日本も多く学べるがあると思います。

会員移動 (14年4月以降)

退会

加藤範夫 (14年4月5日 死亡)

小高忠男 豊田工業大学定年退職 (大阪同窓会に入会)

安彦忠彦 名古屋大学を退職 (早稲田大学教育学部、東京同窓会に入会)

会員名簿 (14年3月刊行) の追加・訂正

(追加)

塚田 守 住所 470-0134 日進市香具山1丁目3403 ン p 3

勤務先 椋山女学園大学 文学部 教授

464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3

渡米実績 年度 1981

留学先 University of Hawaii

専攻 社会学

(訂正)

市野 春男 (住所)475-0856 半田市栄町1-53

加瀬 正幸 (勤務先) 浜松短期大学を定年退職

杉浦 正也 (勤務先) 中京女子大学を定年退職

高井 次郎 (勤務先) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科に移動

角岡 秀彦 (住所) 468-0012 名古屋市天白区向ヶ丘3-1204

(勤務先) 豊川市民病院を退職

初音嘉一郎 (勤務先) 岐阜心臓血管センターを追加

馬場 昌子 (勤務先) 愛知医科大学看護学部

福島 穰 (氏名) 穰に訂正

藤原由紀子 (職名) 名古屋アメリカンセンター副館長

会 議 記 録

役員会

○第1回

日時：平成14年4月26日 16:40～

場所：椋山女学園大学生生活社会科学棟

出席：千田、山田、篠田、上田、梅沢、今辻、若林、木下

報告・議題

- 1 13年度の収支について（会費納入状況）
- 2 13年度の事業について
- 3 14年度の総会開催について
- 4 50周年記念事業について
- 5 15～16年度の役員と事務局について

○第2回

日時：7月26日（金） 18:00～

場所：椋山女学園大学生生活社会科学棟

出席：千田、藤本、篠田、梅沢、今辻、木下、上田

議題

- 1 The Fulbrighter in Chubu 次号の編集方針について
- 2 随想欄の寄稿依頼者について
渡航年代と男女比を考慮して依頼する
- 3 例会の開催について
日時 11月下旬
場所 名古屋大学国際開発研究科
開催方式（パネル・ディスカッション方式）
テーマはフルブライト計画50周年に因んだものとする

○第3回

日時：10月4日（） 18:00～

場所：椋山女学園大学生生活社会科学棟

出席：上田、千田、篠田、梅沢、木下、藤本

議題

1 例会について

スピーカーとして木下徹、和爾起城、馬場昌子、山本恵里子を予定。

日時が11月30日（土）15:00からとする。テーマは、同窓会20周年記念トーク“留学生活を通して見たアメリカ”とする。

2 ニュースレターの編集について

寄稿依頼者を決める。

2002年度総会

2001年度の中部同窓会総会は、6月14日（金）午後3時から名古屋大学大学院国際開発研究科棟8階の会議室で、ゲスト・スピーカーとしてトヨタ自動車株式会社グローバル人事部長の畑隆司氏をお迎えし、会員等20名の出席をえて、予定通り開催された。総会議事終了後、畑氏による「トヨタの経営グローバル化とアメリカ進出」というテーマでのスピーチと参加者とのディスカッションに約1時間20分を費やし、その後会場を一階に移し、恒例の懇親パーティを開いた。

総会で承認されたの主な議事は、以下のとおりである。

1. 2001年度の事業報告

- 1) 総会の開催 2001年6月22日、名古屋大学大学院国際開発研究科棟を会場にして開催。総会議事終了後、ゲスト・スピーカーのサミュエル・M. シェパード氏（日米教育委員会事務局長）による「アメリカの大学教育」をテーマとする講演（国際開発研究科と共催）を聞く。講演終了後、ゲストを囲み会員懇親会を開く。
- 2) 例会の開催 2001年11月2日、名古屋大学大学院国際開発研究科棟で開催。愛知大学助教授の鈴木規夫氏（国際コミュニケ

ーション学部)による講演(イスラーム現象—文明は衝突しない)を聞き、9月11日に起こったアメリカでの同時多発テロ事件をめぐって、イスラーム世界をどう見るべきかについて、ビデオ映像を交えながら話を聞き、意見交換を行った。その後懇親パーティを開き、親睦を深めた。

- 3) 役員会の開催 総会、例会準備のために椙山女学園大学で2回開催。
- 4) 出版 The Fulbrighter in Chubu No.12 と会員名簿(2001年度版)を刊行。
- 5) FMFによるアメリカ教員招聘プログラムへの協力 10月15~16日、アメリカ教育関係者の3グループが関市、三島市、一宮市の3市を訪問。上田慶一、熊野善介、山田健治の3氏が日米教育委員会代表代理として参加・協力した。

2. 2002年度の事業計画

- 1) 総会の開催 6月開催、総会議事、ゲスト・スピーチ、懇親パーティを予定
- 2) 例会の開催 11月ごろを予定。
- 3) 役員会の開催 4月に第1回を開催、さらに2回の開催を予定。
- 4) フルブライト50周年記念事業への協力
- 5) FMFプログラムへの協力
- 6) 出版 ニュースレター13号の編集、年度内の刊行を計画。

3. 2001年度の収支決算報告ならびに会計監査

4. 2002年度の収支予算案

当日の出席者は以下の通り。

畑 隆司(ゲスト)、藤原由紀子、藤本博、藤本文弘、堀菊子、犬飼通之、今辻三郎、今光廣一、木下宗七、木村尚、千田純一、篠田靖子、曾我美勝、上田慶一、梅沢時子、若林満、山田豊太郎、山田健治、Marc Bremer、丸田秀実、菅谷淳子

2002年度例会

例会を2002年14年11月30日(土)午後3時00分から名古屋大学大学院国際開発研究科棟の8階会議室で開催。例年のゲスト・スピーチにかえて、中部同窓会設立20周年に因み、「留學生活を通して見たアメリカ」というテーマで記念トークを行った。パネラーとして馬場昌子('58、看護学)、山本恵里子('98、日系アメリカ人史)、和爾起城('61、航空工学)、木下徹('89、応用言語学)(カッコ内の数字は留學年次、全員中部同窓会会員です)の4氏に登場願ひ、それぞれの体験を通して見たアメリカについて話していただいた。進行と司会は藤本博、上田慶一の両氏が担当した。例会終了後懇親パーティを開き、7時過ぎに解散した。

出席者は以下の通り

馬場昌子、橋本 穆、藤本 博、藤本文弘、服部尚史、木下宗七、木下徹、木村 尚、松波信治、奥村保明、千田純一、篠田靖子、曾我美勝、高仲 顕、上田慶一、梅沢時子、若林 満、和爾起城、山本恵里子



平成13年収支決算（案）（平成13年4月～14年3月）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	481,442		会議費	16,800	役員会費用
利子収入	454		総会費用	22,000	郵便代
年会費	280,000	93名分		90,000	パーティ代
				15,000	アルバイト代
				40,000	講師出張費
				4,893	スタッフ写真代
総会会費	54,000	18名分	例会費用	16,440	郵便代
				49,150	パーティ代
				10,000	アルバイト代
例会会費	51,000	17名分	出版費用	84,000	講演謝礼
				29,400	会報/名簿
				29,400	郵便代
			通信費	6,000	
			旅費	42,000	東京2回
			その他	2,235	消耗品
			次期繰越	415,896	
	866,896			866,896	

注：(1)旅費は全国理事会、50周年記念事業実行委員会（東京開催）出席のための新幹線代。

(2)総会、例会のアルバイト代は、準備と当日のためのアルバイトを含む。

平成13年度の収支決算の内容につき、領収書、預金通帳等関係種類によって監査を行なった結果、適正であることを認め、ここに報告いたします。

平成14年6月8日

監事 藤本 博



資 料
 (1) 歴代役員名簿

年 度	会 長	副会長	幹 事	監 査
1982～1983	高仲 顕	鈴木 猛 長坂源一郎	山本 昂 上田慶一 岩野一郎 千田純一 柴田幸一	石川 進
1984～1988	長坂源一郎	鈴木 猛 山本 昂	上田慶一 岩野一郎 千田純一 朝倉幹夫 木下宗七	石川 進
1989～1990	朝倉幹夫	堀江 昭 岩野一郎	木下宗七 千田純一 上田慶一 大石秀夫	篠田啓一
1991～1992	朝倉幹夫	岩野一郎 千田純一	木下宗七 上田慶一 大石秀夫 伊藤陽一	篠田啓一
1993～1994	岩野一郎	千田純一 森島昭夫	木下宗七 上田慶一 大石秀夫 伊藤陽一	篠田啓一
1995～1996	岩野一郎	千田純一 大石秀夫	木下宗七 上田慶一 伊藤陽一 森島昭夫 今辻二郎	篠田啓一

1997～1998	木下宗七	千田純一 大石秀夫	今辻三郎 岩野一郎 梅沢時子 上田慶一 篠田靖子 梅沢時子 若林 満	篠田啓一
1999～2000	木下宗七	千田純一 和爾赳城	今辻二郎 上田慶一 梅沢時子 川島正樹 (篠田啓一) 篠田靖子 若林 満	篠田啓一 (川島正樹)
2001～2002	木下宗七	千田純一 上田慶一	今辻二郎 梅沢時子 篠田靖子 若林 満 和爾赳城 山田健治	藤本博

注：1999～2000年度で、2年目に篠田啓一氏と川島正樹氏が役職を交代した。

(2)同窓会員の滞在地域分布

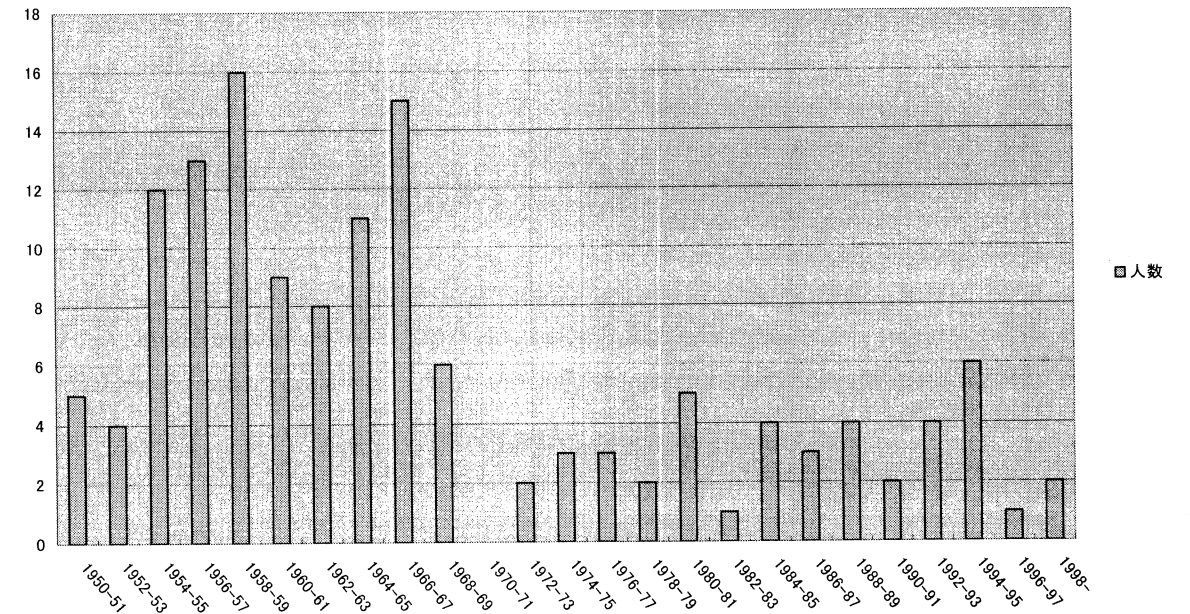
州	大学	人数	州小計
AK	Methodist U.	1	1
AL	U. of Alabama	1	1
CA	U. of California	6	
CA	Stanford U.	4	
CA	San Francisco State	1	11
CO	Colorado State U.	1	
CO	U. of Colorado	2	3
CT	Yale U.	4	
CT	U. of Connecticut	1	
CT	Wesleyan U.	1	6
DC	American U.	2	2
DE	U. of Delaware	1	1
FL	Florida State U.	1	1
HI	U. of Hawaii	1	1
IA	Iowa State U.	1	
IA	U. of Iowa	1	2
IL	Southern Illinois U.	1	
IL	U. of Michigan	9	
IL	U. of Chicago	2	
IL	U. of Illinois	2	
IL	Northwestern U.	1	19
IN	Purdue U.	4	
IN	U. of Indiana	2	
IN	Indiana U.	2	8
KS	Kansas State U.	1	1
MA	Boston U.	3	

MA	Harvard U.	8	
MA	MIT	1	12
MD	Johns Hopkins U.	3	
MD	U. of Maryland	2	5
MN	U. of Minnesota	1	1
MO	Washington U.	1	1
MS	U. of Mississippi	1	1
MT	U. of Montana	1	1
NC	U. of North Carolina	4	
NC	Duke U.	2	6
NE	U. of Nevada	1	1
NJ	Rutgers U.	3	
NJ	Princeton U.	3	6
NY	Cornell U.	3	
NY	New York State U.	1	
NY	Columbia U.	4	
NY	New York U.	2	
NY	SUNY	1	
NY	Syracuse U.	2	
NY	Albany Medical U.	1	
NY	St. John's College	1	15
OH	Ohio State U.	2	2
OK	U. of Oklahoma	1	1
OR	Oregon State U.	1	1
PA	U. of Pennsylvania	5	
PA	Lehigh U.	1	
PA	Penn State U.	1	7
RI	Brown U.	2	1
TN	U. of Tennessee	2	1

TX	U. of Texas	6	
TX	Houston U.	1	7
WA	U. of Washington	2	2
WI	U. of Wisconsin	4	4

(3) 同窓会員の渡米年度別分布

会員の渡米年度別人数



(4) 同窓会報 総目次 1984-2002

種別	著者	標題	刊行年
巻頭言	高仲 顕	同窓会誌発刊の辞に代えて	1984
	朝倉幹夫	会長をお引き受けして	1989
	堀江 昭	40周年記念事業に向けて	1991
	岩野一郎	クリントンとフルブライト	1993
	千田純一	脱欧米、入亜か?	1995
	篠田啓一	英語の国際性と多様性—いま、国際交流の現場では	1996
	大石秀夫	自動車産業における日米交流	1997
	木下宗七	アジア通貨危機と留学生問題	1998
	木下宗七	アメリカの銀行合併にみる地域社会と企業の関係	1999
	木下宗七	フルブライト計画 50周年に向けて	2000
	服部正夫	フルブライト交流計画 55年の思い出	2001
	木下宗七	日米フルブライト・プログラム 50周年を迎えて	2002
ゲスト・スピーチ			
	室伏靖子	チンパンジーの知的行動	1984
	Wiliam Pickett	The Showa Emperor and World War II :View of American Historians	1989
	A.J.Cortese	Minority group in America: What I would like to tell the Japanese People	1991
	近藤 健	書けなかった、書かなかったもうひとつの日米関係	1993
	Gretchen L.Richter	日系ブラジル人のアイデンティティ危機	1995
	Leola Madge	The Aesthetics of Social Relations in a New Economic Order	1996
	Jeffrey M. Jamison	George Washington's Farewell Address,	

Two Hundred Years Later: Lasting on U.S.Foreign and Domestic Policy 1997

加籾延夫	微生物の脅威	1998
Daniel L/Shields,III	Continuity and Change in US-Japan Relations	1989
Christpther Boudreau	仮想世界における多言語通信の検討	1999
原田靖博	最近の金融経済情勢について	1999
アッシャー・Shigeko	Increasing Priority to Girls Education	2000
松波信治	アメリカの地方メディア事情	2000
Alice H. Amsden	Economic Nationalism in the Age of Globalism	2001
JoAnne Livingston	U.S. & Japan: A Comparative Look at Community Partnership in Education	2001
Samuel M.Shepherd	U.S.Higher Education:A Comparative Perspective	2002
鈴木規夫	イスラーム現象「文明は衝突しない」	2002
雑感		
堀江 昭	中部同窓会に入れて戴いて	1989
David Flath	My Japan Experience as a Fulbrighter	1989
長坂源一郎	日米間のこれから	1991
千田純一	アメリカの金融不安と預金保護	1991
藤原由起子	新しい世代の日米関係を築くために	1993
随想		
高仲 顕	留学生昔話	1998
植下 協	フルブライト氏の理念によって育てられた私の人生	1998
上田慶一	"Rediscovering America"に参加して	1998
市川紀男	サザン・ホスピタリティ	1998
川島正樹	ボストンでの現地滞在研究を終えて	1998
堀 菊子	あの頃(1950-51)が好きなわけ	1999

	寺西勇二 開眼	1999
	和爾尙城 私にとっての Fulbright Program	1999
	山田健治 デラウェア大学への留学	1999
	森 あおい Busy as a Bee	1999
	土岡弘道 フルブライト留学が与えてくれたもの	2000
	曾我美勝 楓 (フウ) の並木	2000
	松浦以津子 身辺雑感	2000
	稲木せつ子 無題	2000
	鮎川 潤 研究と情報公開	2000
	山田豊太郎 人生の岐路	2001
	古橋宏造 バークレーで出会った「市場主義」	2001
	馬場昌子 戦後日本の看護教育創造の 40 年を生きて	2001
	藤本 博 ラトガース大学のこと—第一期官費留学生 ・日下部太郎 (1845-1870)	2001
	結城正美 リノ、ウィルダネス、コミュニティー	2001
	木村 尚 MITFSSP の思い出	2002
	太田 宏 今はるか、忘れ得ぬボストン、ニューヨーク	2002
	篠田靖子 女性の社会進出と私	2002
	若林 満 シンシナティ大学での研究と生活を振り返って	2002
	山本恵里子 アメリカからもらった元気—日本とジェンダー と学問	2002
その他	石川 進 On "Orientation Course"	1984
	上田慶一 報告：米国教師訪問団一行を迎えて	2001
	木下宗七 篠田啓一さんを偲ぶ	2001

G	中部同窓会
F	事務局より

中部同窓会の会報、*The Fulbright in Chubu* 13号をお届けします。寄稿いただいた会員の方々にお礼申し上げます。編集では役員の千田純一・梅沢時子のお二人に大変お世話になりました。

2002年度は日米フルブライト計画が始まって50周年であり、また、中部を含め全国各地域にガリオア・フルブライト同窓会が設立されて20周年でもありました。東京では国際フォーラム等を会場にしてシンポジウムほか50周年記念行事が開催されました。その記録のひとつとして、シンポジウムが『21世紀の国際知的交流と日本』（編集賀来景英・平野健一郎）として中央公論新社から出版されております。東京の会場に出向くことが出来なかった方々はぜひお読みいただきたいと思います。中部同窓会でも秋の例会で会員をパネラーとしたディスカッションを開催し、それぞれの体験を踏まえたアメリカ像を語っていただき、これからの日米関係や国際交流について考える機会を持ちました。

今回の会報では、中部同窓会の20周年特別編集として、初代会長の特別寄稿ほか、資料として歴代の役員、会員の滞在地・大学の分布、創刊号以来の会報の主要目次等を掲載いたしました。お読みいただいたご感想を事務局までお知らせください。

日本の高齢化と同様、中部同窓会の会員の高齢化も進行しております。総会、例会の開催を含め、会員相互の交流をどういう形で進めるのが良いか、ご意見がありましたらお知らせください。

発行年月日 平成15年3月31日

発行 ガリオア・フルブライト中部同窓会

事務局 468-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3

椋山女学園大学生生活科学部 木下研究室気付

電話 052-781-1186 (代表) 内線647

電子メール kinosita@ss.sigiyama-u.ac.jp